

旧谷汲村水田地帯におけるサギ類の採食場所の季節変化

菊池真梨

調査目的 サギ類はコウノトリ目サギ科に属し、農村環境の中でも特に水田地帯を重要な採食場所としている鳥類である。近年、集団繁殖地の消失や規模の縮小など個体数の減少が報告されており、一部の種が環境省のレッドリストに記載されている。このようなサギ類の減少には、減反政策や圃場整備等による水田地帯の環境変化が大きく影響していると考えられる。今後、水田地帯でサギ類の保全を効果的に行うためには、サギ類に適した生息環境を明らかにすることが必要である。そこで本研究では、サギ類の中でも水田地帯で一年を通して観察することができるアオサギとダイサギを対象とし、この2種の採食場所として重要となる水田地帯の環境要素について、採食場所の季節変化から検討した。

調査概要 調査地区は岐阜県揖斐郡旧谷汲村の谷汲大洞および谷汲深坂地区の水田地帯とした。アオサギとダイサギの個体数とその採食場所について、調査ルートを車で時速 10～20km で走行しながら調査地区全体を観察した。走行中にサギを発見した場合には、双眼鏡(8倍)を用いて種を確認し、地図上に個体の位置を、別紙に採食場所の環境について詳細に記録した。土地区分は水田、畑、休耕田、排水路、河川、ファーム Pond(以下 FP)、ビオトープ(以下 BT)の7つに分類した。なお FP とは農業用水の貯留池のことで、BT とは休耕田を利用したビオトープ水田や、魚類などの保護湿地のことを指す。これらの調査は、両種の繁殖期が含まれる 2008 年 4 月から同年 11 月まで計 31 回、毎回午前 7:00～10:00 に行った。

結果および考察 アオサギとダイサギの個体数割合は、両種ともに 5～10 月に農耕地(水田・畑・休耕田)で増加し、それ以外の時期は河川や溜池(FP・BT)で高くなる傾向がみられた。特に農耕地についてみると、水稲が作付され、稲丈が低い 5～6 月の水田で増加し、7 月から稲刈りまでの期間は水田での稲丈が高くなるため、休耕田で増加する傾向がみられた。河川や溜池で通年餌となる魚類が確認できるにもかかわらず、この時期に農耕地での個体数割合が増加したのは、サギ類の餌となる生物が増加したことに加え、河川や溜池に比べ採食が容易であったためと推測できる。また、観察個体数の季節変化についてみると、アオサギが 6 月、ダイサギが 8 月にピークを示した。これはそれぞれの巣立ちの時期に一致しており、この時期に幼鳥が採食を行うようになったと考えられる。ピーク時に個体数割合が高かった採食場所は、アオサギが水田(60%)、ダイサギが休耕田(73%)であった。ダイサギも 6 月には水田における割合が高くなっていたが、巣立ちの時期である 8 月には高い稲丈が採食の妨げとなるため、多くの個体が休耕田を利用したと考えられる。つまり、農耕地は採食に不慣れな幼鳥にとって特に重要な採食場所であると考えられる。今回の結果から、アオサギとダイサギを保全するためには、河川や溜池だけでなく、水田が必要であり、特にダイサギには巣立ちの時期である 8 月頃に休耕田が重要であると考えられる。